

# イライジャ - ナンバー13

## 四十六

Jeff Pippenger

2023-10-19

前回の記事では、エリヤを1798年から1844年に至る歴史に重ね合わせていました。ウィリアム・ミラーが第一の天使のメッセージを宣べ伝えるために起こされたとき、エリヤは象徴的にその歴史に入ります。サレプタのやもめは、二本の棒、すなわち1844年10月22日に一つの国民となる二つの国民を集めている忠実な教会を表しています。

彼らに言え。神である主はこう言われる。見よ、わたしは、彼らが行き散った異邦の民の間からイスラエルの子らを取り、四方から彼らを集め、彼らを彼ら自身の地に連れて行く。わたしは彼らを、イスラエルの山々の地で一つの国とし、ひとりの王が彼らすべての上に王となる。彼らはもはや二つの国とはならず、二つの王国に分かれることも決してない。彼らはもはやその偶像によっても、忌むべきものによっても、いかなる背きによっても自らを汚すことはない。むしろ、彼らが罪を犯したそのすべての住まいから彼らを救い出し、彼らを清める。こうして彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。わたしのしもべダビデが彼らの上に王となり、彼らはみなひとりの牧者を持つ。彼らはまた、わたしの裁きに従って歩み、わたしの掟を守ってこれを行う。彼らは、わたしがわたしのしもべヤコブに与えた地、あなたがたの先祖が住んだその地に住む。彼ら自身と、その子らと、その子の子らが、永遠にそこに住む。わたしのしもべダビデが、とこしえに彼らの君となる。さらに、わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。それは彼らとの永遠の契約となる。わたしは彼らを据え、彼らを増やし、わたしの聖所を永遠に彼らのただ中に置く。わたしの幕屋もまた彼らと共にある。まことに、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。わたしが主であってイスラエルを聖別する者であることを、異邦の民は知る。わたしの聖所が永遠に彼らのただ中にあるときに。エゼキエル書 37:21-28。

エゼキエルは、一つの国民となる二つの国民を表す二本の棒に約束されたいくつかの祝福を挙げています。私たちはまず、その祝福のうち、ホワイト姉妹が四つの「来臨」として示した四つを考察します。これらはすべて1844年10月22日に同時に成就しました。

ダニエル書8章14節に示されている、聖所の清めのために私たちの大祭司としてキリストが至聖所に来られること、ダニエル書7章13節に示されている人の子が「日の老いたる者」のもとに来られること、そしてマラキが予告した主がご自分の宮に来られることは、いずれも同じ出来事の描写である。また、これはマタイ25章の十人の乙女のたとえにおいてキリストが述べられた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。『大争闘』426ページ。

ホワイト姉妹が言及している最初の「来臨」は、「聖所の清め」のために大祭司が来ることであり、それは二千三百年の終わりに起こるはずのものであった。その節は、「日ごとのささげ物と、荒廃をもたらす背きについての幻はいつまで続き、聖所と軍勢がいつまで踏みにじられるのか」と問うダニエル書八章十三節の質問に答えを与えている。十四

節は、聖所の清めが二千三百年の終わりに始まることを示している。エゼキエルは、神が「彼らが散って行った諸国民の中からイスラエルの子らを取り出し、四方から彼らを集め、…、そして集められた国民はもはや自分たちを汚さない」と言い、神は「彼らを清める。こうして彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる」と述べている。

1844年10月22日、ホワイト姉妹が言及した第二の「来臨」は、ダニエル書7章13節の成就であり、そこでは人の子が王国を受けるために「日の老いたる者」のもとに来ることが示されている。エゼキエルは、神が「イスラエルの山々の地で彼らを一つの国民とし、一人の王が彼らすべての者の王となる」と言われると述べている。エゼキエルはまた、「わがしもべダビデが彼らの上に王となる」と言うとき、キリストを「ダビデ」という名の王として表している。さらに彼は、キリストがダビデとして彼らの「ただ一人の牧者」であり、その「しもべダビデが」また「永遠に彼らの君となる」とも示している。王とは定義上、王としての称号を持ち、統治すべき領土と、その王国の国民を必要とする。国民がいなければ、王国は存在しない。

私は夜の幻の中に見た。見よ、人の子のような者が天の雲に乗って来て、日の老いたる者のもとに来た。彼はその方の前に導かれた。彼に主権と栄光と国が与えられ、すべての民、諸国、諸言語の者が彼に仕えるようになった。彼の主権は永遠の主権であって、過ぎ去ることがなく、その国は滅ぼされることがない。ダニエル書 7章13、14節。

ホワイト姉妹が指摘した第三の「来臨」とは、キリストが「契約の使者」としてレビの子らを清めるため、ご自身の宮に突然来られたときのことであった。エゼキエルは、キリストが「彼らを清める。こうして彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる」と語り、さらに「彼らと平和の契約を結ぶ」それは「永遠の契約となる」とも述べている。その契約は、神がご自身の「聖所を彼らのただ中に置く」ときに成就し、「わたしの聖所が彼らのただ中にあるとき、異邦人は、主なるわたしがイスラエルを聖別することを知る」とされている。

見よ、わたしは使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが求める主が、突然その宮に来られる。あなたがたが喜ぶ契約の使者も。見よ、彼は来る、と万軍の主は言われる。しかし、彼の来る日をだれが耐えられようか。彼が現れるとき、だれが立ってられようか。彼は精錬する者の火のようであり、洗濯する者の灰汁のようである。彼は銀を精錬して清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金や銀のように精錬する。彼らが義にかなったささげ物を主にささげるためである。そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々、いにしえの年のように、主に喜ばれるものとなる。マラキ 3:1-4。

1798年から1844年にかけての歴史において、キリストのために道を備えた「契約の使者」は、ウィリアム・ミラーにより象徴されるエリヤであった。キリストが突然ご自分の宮に来られたとき、「精錬者の火」のように「レビの子ら」を清められた。

1844年10月22日に成就したもう一つの「来臨」は、花婿の来臨であった。エゼキエルは二度にわたり、二本の棒から集められた国民が「神の民となり」、神が「彼らの神となる」ことを示している。これは婚姻によって成就した。1844年10月22日に成就した、ホワイト姉妹が言及する四つの預言は、いずれもエゼキエルの二本の棒の証しによって示され

ている。

エリヤは、「契約の使者」のために道を備える使者を表している。キリストは、ご自身の初臨のために道を備えた使者としてバプテスマのヨハネを指し示された。ホワイト夫人はウィリアム・ミラーをエリヤであるとし、ミラーはキリストが「大祭司」「人の子」「契約の使者」「花婿」として来られるための道を備えた。

三年半ののち、やもめとその息子のもとに滞在していたサレプタからエリヤが来て、アハブに、イスラエルの民全体をカルメル山に呼び集めるよう命じた。エゼキエルは、二本の棒から一つに集められた民のただ中に神がご自分の聖所を置くとき、異邦人は神がまことの神であることを知る、と言う。カルメル山でエリヤはイスラエルに、神がまことの神か、あるいはバアルがまことの神かを選ぶよう求めたが、彼はこの問題を、まことの神はだれかというだけでなく、まことの預言者はだれかという観点からも提示した。

エリヤはすべての民のところに来て言った。「いつまで二つの意見の間でためらっているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、彼に従え。」しかし民は彼に一言も答えなかった。そこでエリヤは民に言った。「主の預言者として残っているのは、私、ただ私ひとりだ。だがバアルの預言者は四百五十人いる。」列王記上 18章21、22節。

天から火が下ってエリヤのささげ物を焼き尽くしたとき、アハブを含むイスラエルのすべての者は、エリヤの神こそ神であることを知った。カルメル山に火が下ったことは、神が二本の棒からなる国のただ中にご自分の聖所を置かれた時を画する出来事であった。カルメル山での火の奇跡は、神こそ神であり、バアルは偽りの神であることを示した。

サレプタで、エリヤがやもめの死んだ息子の上に三度身を横たえた奇跡は、彼女にとってエリヤが神の人であることの証となり、カルメル山での奇跡も同様であった。カルメル山の火は、神がまことの神であることを証明しただけでなく、バアルの預言者や林の預言者と対比して、エリヤが神の真の預言者であることをも示した。1840年から1844年にかけての歴史においては、ミラーとミラー派が真の預言者であることが示され、同じ歴史の中で、背教的なプロテスタント主義の偽預言者たちは、自らがイゼベルの娘たちであることを明らかにしていた。

カルメル山のエリヤは、真のプロテスタントの角を識別する働きを表している。というのも、聖書予言における第六の王国、すなわち黙示録13章の地の獣は、プロテスタントの角と共和主義の角を持ち、1798年にちょうどその支配を開始したからである。1798年、イゼベルの支配の三年半の終わりに、エリヤはサレプタから、地の獣におけるプロテスタントの角がどの教会であるかを明確に区別するためにやって来た。

サレプタのやもめは、テアテラの歴史から婚礼へと旅していた。そこで彼女の寡婦の身は取り去られることになっていた。よみがえらされた息子は、干ばつの三年半の間にイゼベルに殺された者たちを表している。彼女が火のために集めていた二本の棒は、文字どおりのイスラエルの二つの家を表しており、それらは一つの国に集められるはずで、その国は霊的イスラエルであった。やもめはその二本の棒で火を起こそうとしていたが、そのことはカルメル山で、また1844年10月22日に起こった。すなわち、契約の使者が「精錬する

者の火」をもってレビの子らを清めたときである。

火は、神の霊の注ぎの象徴であり、それはカルメルで、また1844年10月22日に頂点に達した真夜中の叫びの時にも起こった。

ペンテコステの日が来たとき、彼らは皆、心を合わせて一つ所に集まっていた。すると、突然、激しい風が吹いてくるような響きが天から起こり、彼らが座っていた家全体を満たした。また、火のような分かれた舌が現れて、一人ひとりの上にとどまった。すると皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、ほかの国々のことばで話し始めた。使徒の働き 2:1-4。

聖霊の注ぎはメッセージの宣言を表しており、やもめは食べるものを用意するために火を起こそうとしていた。それはメッセージである。

そして私は天使のところへ行き、彼に言った。「その小さな巻物をください。」すると彼は私に言った。「取って食べなさい。それはあなたの腹を苦くするが、口には蜂蜜のように甘いであろう。」そこで私は天使の手から小さな巻物を取って、それを食べた。すると、それは私の口には蜂蜜のように甘かったが、食べ終わるとすぐに、私の腹は苦くなった。黙示録 10:9, 10。

アハブがイゼベルにただちに告げた知らせは、エリヤの神こそまことの神であるということだった。というのも、アハブはエリヤの神が火で応えたのを見たばかりだったからである。1844年10月22日にただちに明らかにされたメッセージは、第三天使のメッセージであった。いずれの場合でも、アハブが伝えた知らせも第三天使のメッセージも、イゼベルを激怒させる。

しかし、東からと北からの知らせが彼を騒がせる。それゆえ、彼は大いなる憤りをもって出て行き、滅ぼし、多くの者をことごとく絶ち滅ぼそうとする。ダニエル書 11:44

ダニエル書の「東と北からの知らせ」は、北の王、すなわちイゼベルを激怒させるメッセージを表しており、彼女は地上の歴史における最後の迫害を開始する。そのメッセージは、アハブがイゼベルに送った知らせと、1844年に審判が開かれた際の第三天使のメッセージの到来によって表されていた。

アハブは、エリヤが行ったすべてのこと、すなわち彼が剣で預言者たちをことごとく殺したことをイゼベルに告げた。するとイゼベルはエリヤのもとに使いを送り、こう言わせた。「もし私が明日の今ごろまでに、お前の命を彼らのうちのひとりの命と同じにしなかったなら、神々が私にこのようにし、さらにこの上に加えられるように。」列王記上19:1、2。

象徴としてのエリヤは、538年から1798年にわたる荒野の時代を通して表されている。そして1798年には、エリヤはウィリアム・ミラーとして歴史に現れる。1844年には、エリヤは天から「真夜中の叫び」の火を降らせている。さらに1863年には、エリヤとそのメッセージは拒絶された。彼のメッセージは「七つの時」についてのモーセのメッセージであり、またエゼキエルの二本の棒のメッセージによっても表されていた。散らしの期間の終わりに二本の棒が集められることは、サレプタのやもめのメッセージであり、彼女は食事

を用意する前に二本の棒を集めた。

ジェームズとエレン・ホワイトによれば、ミラー派アドベンチズムは1856年にラオデキヤ的アドベンチズムとなり、その後1863年にモーセの「七つの時」に関するエリヤのメッセージを拒んだとき、彼らは、神が1856年に（ハイラム・エドソンの未完の八本の記事を通して）もたらそうとしておられた「七つの時」の知識の増し加わりを理解するための論理的能力を自ら失ってしまった。彼らは論理上、天使がウィリアム・ミラーを導いて組み立てさせた真理の基礎体系を崩し始めざるを得なくなった。ミラーが見いだした最初の「石」は、ラオデキヤ的アドベンチズムがその全歴史を通してつまずき続けることになる礎石であった。その最初の真理の石の拒絶がラオデキヤの盲目を生み出した。それは治し得る症状ではあるが、ほとんど追求されない。

1844年10月22日に始まった神殿の清めは、ダニエル8章13節で聖所とともに踏みにじられていた「軍勢」の清めをも含んでいた。「軍勢」は、ザレファテのやもめが火のために集めた「二本の棒」によって表されていた。その二本の棒は、文字どおりの古代イスラエルの二つの家を指していた。文字どおりのエフライムとユダは、一つの霊的な国民へと集められ、裁きの開始において契約の使者によって清められることになっていた。これら二つの国民こそが、踏みにじられていた「軍勢」であった。

エゼキエルの約束は、神が「彼らが行ってしまった異邦人の中からイスラエルの子らを取り出し」、「彼らを集め」、「彼らを彼ら自身の地に連れて行く」というものであった。文字どおりのイスラエルの地は、栄光の地、あるいは約束の地、あるいはユダであった。1798年における霊的な栄光の地は、黙示録十三章の二本の角を持つ地の獣の地であった。

わたしが彼らに向かって手を挙げ、彼らをエジプトの地から連れ出して、彼らのためにわたしが見定めた地、乳と蜜の流れる、諸国の栄えである地へ連れて行くと言ったその日に、……しかしまた、荒野でわたしは彼らに向かって手を挙げ、乳と蜜の流れる、諸国の栄えである、彼らに与えたその地へは彼らを入れないと言った。エゼキエル 20:6、15。

イスラエルの二つの文字どおりの家は、「すべての地の栄光」であり、「乳と蜜」が「流れる」地に住んでいた。イスラエルの二つの文字どおりの家が霊的イスラエルとしてひとつに集められたとき、彼らは自分たちの土地に置かれると約束された。霊的な「栄光の地」とは、地の獣の支配の間、初めのミラー派の運動と終わりの十四万四千人の運動が位置する場所である。十四万四千人を代表する運動は、地の獣の地でしか興りえなかった。いかなる他の地からのものであっても、第三の天使の運動を名乗る運動は偽物である。なぜなら、アルファとオメガはつねに初めをもって終わりを示すからである。

比類のない神のあわれみと祝福が、わが国に降り注いできた。わが国は自由の地であり、全地の誉れであった。しかし、神に感謝をささげる代わりに、神とその律法を敬う代わりに、アメリカでキリスト者であると公言する人々は、高慢と貪欲と自己満足に染められてしまった……。

今や、巷では裁きが地に倒れ、公正は入ることができず、悪を離れる者は自ら獲物となる時が来た。しかし、主の御腕が救えないほど短いのではなく、主の御耳は聞くこ

とができないほど鈍いのもない。アメリカ合衆国の民は、これまで恵まれた民であった。しかし、彼らが宗教の自由を制限し、プロテスタントイズムを放棄し、教皇主義を容認するなら、彼らの罪は満ち、「国家的背教」が天の書に記録されるであろう。この背教の結果は国家的破滅である。Review and Herald, 1893年5月2日。

ダニエル書第8章13節と14節は、聖所と軍勢の双方が踏みにじられることを示している。軍勢とは、文字どおりのイスラエルの二つの家のことだった。暗黒時代の一千二百六十年間、エルサレムは踏みにじられていた。

そして、わたしに杖のような葦が一本与えられた。御使いが立って言った、「起きて、神の神殿と祭壇と、その中で礼拝する者たちとを測れ。しかし、神殿の外庭は除いて、これを測ってはならない。これは異邦人に与えられているからである。彼らは四十二か月の間、聖なる都を踏みにじるであろう。」ヨハネの黙示録 11:1, 2.

黙示録第11章で、ヨハネは神殿だけでなく、「その中で礼拝する者たち」も測るように命じられている。ヨハネが神殿とその中で礼拝する者たちを測るよう命じられたとき、彼は預言的に1844年10月22日に位置づけられていた。

そして私は天使の手から小さな巻物を取り、それを食べた。するとそれは口には蜜のように甘かったが、食べた途端、腹は苦くなった。ヨハネの黙示録 10:10

黙示録10章10節において、ヨハネは1844年10月22日の苦い失望を象徴し、その直後に聖所と軍勢の双方を測るよう告げられた。ダニエル書8章13節の問いの主題は、聖所と軍勢の双方が踏みにじられることである。ヨハネは、「異邦人」が「四十二か月」の間「聖なる都」を「踏みにじる」と告げている。この四十二か月はエリヤの三年半であった。それは538年から1798年までの暗黒時代であった。預言的に1844年10月22日の時点に立って、ヨハネは外庭を除外し、「それを測ってはならない。異邦人に与えられているからであり、彼らは四十二か月の間、聖なる都を踏みにじるであろう」と告げられた。

ヨハネが『神殿と祭壇と、その中で礼拝する者たち』を測るようと言われたとき、ダニエル八章十三節のことばで言えば、彼は聖所と軍勢を測るよう命じられたのである。もしヨハネが『千二百六十年を数えるな』と言われたのなら、彼は1798年から、彼が立っていた1844年の時点までを測ることになった。1798年から1844年までを測ると、四十六年に当たる。その四十六年の始まりは1798年であり、そのときイスラエルの北の家に対するモーセの『七たび』が成就した。その四十六年の終わりは1844年であり、そのときイスラエルの南の家に対するモーセの『七たび』が成就した。ヨハネの測定は四十六年に等しい。四十六という数は神殿を象徴する。イエスは『この神殿をこわしてみよ。三日のうちにわたしがそれを建て直す』と言われたが、理屈をこねるユダヤ人たちは、その神殿は四十六年かけて建てられたのだと主張した。

イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿を壊してみよ。三日でわたしがそれを建て直す。」するとユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかったのに、あなたは三日でそれを建て直すのですか。」しかし、イエスの言っておられたのは、ご自身のからだという神殿のことだった。ヨハネ 2:19-21

イエスは、アダムが墮落した後の肉、その中に遺伝的に受け継がれてきたあらゆる墮落した性質を伴う肉を取られ、私たちが彼が勝利したように勝利できるよう模範を示された。二人の証人の証言に基づいて言えば、キリストの肉が四千年にわたる罪の結果としての遺伝的墮落を含んでいなかったと教えることは、バビロンのぶどう酒を広めることだ。というのは、キリストがそれらの遺伝的弱さを受け入れなかったと教えることは、カトリックの主要教義だからである。

また、イエス・キリストが肉となって来られたことを告白しない霊は皆、神からのもではありません。これは、あなたがたが来ると聞いていた反キリストの霊であり、今すでに世にあります。第一ヨハネ 4:3

多くの人を惑わす者が世に出てきており、イエス・キリストが肉となって来られたことを告白しない者たちがいます。こういう者は惑わす者であり、反キリストです。ヨハネの手紙第二 1:7

キリストの身体の神殿は、すべての人間の身体の神殿であった。

キリストは、荒れ果てた荒野にあってサタンの誘惑に耐えるにあたり、エデンで誘惑を受けたアダムほど有利な立場にはなかった。神の御子はみずからを低くし、人類がエデンから、そして本来の純潔と正しさの状態から四千年さまよい離れた後の人性をお取りになった。罪は長きにわたり人類に恐るべき刻印を刻みつけてきており、肉体的にも精神的にも道徳的にも退廃が人類全体に横行していた。

エデンの園でアダムが誘惑者に試みられたとき、彼には罪の穢れがなかった。彼はその完全さのゆえの力をもって神の御前に立っていた。彼の存在のすべての器官と諸能力は等しく発達し、調和よく均衡が取れていた。

キリストは、誘惑の荒野で、アダムが耐えられなかった試練に耐えるために、アダムの代わりに立たれた。ここで、アダムが自らの住まいの光に背を向けてから四千年後に、キリストは罪人のために勝利された。神の御臨在から離され、人類は代を重ねるごとに、エデンでアダムが有していた本来の純潔と知恵と知識から、ますます遠ざかっていった。キリストは、人を助けるために地上に来られたときに存在していたとおりの罪と弱さを、人類のものとして負われた。人類のために、墮落した人間の弱さを身に負いつつ、キリストは、人間が攻撃されるあらゆる点においてサタンの誘惑に耐えねばならなかった。『セレクトッド・メッセージズ』第1巻、267、268ページ。

ヨハネによる福音書第2章で、キリストはご自身の体を神殿にたとえて語っており、その体なる神殿は、四千年にわたって積み重なった弱さによる退化を負った人間のものだった。キリストが言及したこの人間の神殿は、四十六本の染色体から成っている。モーセが律法と神殿を建てるための指示を受けるためにシナイ山に登ったとき、彼は四十六日間その山にいた。エゼキエル書は、二本の棒の「真ん中」にキリストがご自身の神殿を据えられることに言及している。ヨハネが測るよう告げられた、北王国と南王国の七つの時の終結からの期間は四十六年であり、それは1798年と1844年の間の「真ん中」、すなわちその期間を表していた。その四十六年の間に、イエスは、契約の使者として来られるときに突然清めることになる霊的な神殿を築かれた。契約の使者として、イエスはご自分の民の心にその律法を書き記される。その律法は二枚の板によって表されている。第一の板に

は四つの戒めがあり、第二の板には六つの戒めがある。合わせて四十六という数を表している。

1798年から1844年に至るまでの霊的イスラエルの集結は、霊的イスラエルの集結を表しているが、同時に神殿の建設も表している。

人々には確かに退けられたが、神に選ばれ、尊い、生ける石なるその方に近づくとき、あなたがたもまた、生ける石として、霊的な家に築き上げられ、聖なる祭司となつて、イエス・キリストによって神に受け入れられる霊的ないけにえをささげるのです。

それゆえ、聖書にもこう書かれている。「見よ、わたしはシオンに、選ばれた尊い隅のかしら石を据える。彼を信じる者は、決して恥を見ることがない。」

それゆえ、信じるあなたがたにとっては、彼は尊い。しかし、不従順な者たちにとっては、「家造りらが捨てた石、これが隅のかしら石となった」のであり、また「つまずきの石、妨げの岩」でもある。彼らは御言葉に不従順であるがゆえに、そこにつまずくのであり、そのことのために彼らは定められていたのである。

しかし、あなたがたは選ばれた種族、王の祭司、聖なる国民、特別な民である。それは、あなたがたを暗闇からその驚くべき光へと召してくださった方の栄誉を宣べ伝えるためである。あなたがたは、かつては民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けていなかった者が、今は憐れみを受けたのである。ペテロの第一の手紙 2:4-10。

1798年から1844年にかけて建てられたその神殿には、不従順に「定められた」一群が含まれている。彼らの不従順は、「七つの時」「隅のかしら石」、そして「建てる者たちの捨てた石」（すなわち「つまずきの岩」「つまずきの石」）を拒絶したことに表れた。

「神に選ばれた」者たちは、人々に「退けられた」「石」を「生ける石」として、また「神に選ばれ、尊い」とされた「石」として認めた。「神に選ばれた」「選ばれた世代」は、「昔は」「民ではなかった」が、そのときには「神の民」となるはずであった。神が二本の棒を集めたとき、神は彼らを「異邦人」の中から連れ出した。神が1798年から1844年までの46年間に二つの国民を一つにまとめたとき、彼らは神の民となるはずであった。

土台はただ一つであり、その土台はイエス・キリストである。しかし、不従順な者たちに退けられた歴史における土台、すなわち「つまずきの石」は、モーセの「七つの時」であった。1863年に「七つの時」が退けられたとき、それはイエス・キリストを退けることだった。

1844年10月22日に始まった聖所の清めは単に二千三百年の預言の成就にすぎないとする作り話の寄せ集めは、空の聖所、会衆のいない聖所、国民のいない王国を指し示す。靈感によって与えられた聖所の目的のうち、神が聖所の目的として語られたことより優先されるものは存在しない。

そして、彼らに、わたしのために聖所を造らせよ。それは、わたしが彼らの間に住むためである。出エジプト記 25章8節

聖書において、神の聖所は、いつも神の民、すなわち軍勢と結びついている。二本の棒として示されたエゼキエルの預言では、それらは二つの国民を表しており、一つの国民となり、神の聖所が彼らのただ中に置かれるはずであった。ダニエル書8章13節の問いが実際に何を問っているのかを隠すためにその問いを曲解することは、同時に、その問いに答えるよう求められた13節の「ある聖者」をも拒むことになる。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると別の聖なる者が、語っていたその聖なる者に言った。「常の献げ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きによって聖所も軍勢も踏みにじられることは、いつまで続くのですか。」そして彼は私に言った。「二千三百日までである。その後、聖所は清められる。」ダニエル書 8章13、14節。

質問を受けた天の存在は「ある聖者」と呼ばれており、その表現は「驚くべき数える者、秘事を数える者」を意味するヘブライ語「Palmoni」の訳である。アドベンチズムの中心的な柱であり土台となっているその箇所、キリストはご自身をその「驚くべき数える者」として示している。彼は、聖書で最長の年代預言と二千三百日の年代預言との関係を明らかにする、まさにその場でそうしている。最長の年代預言はモーセの誓い、すなわちレビ記26章の「七つの時」である。それはイスラエルの二つの家の散らしと奴隷化を示す預言であり、彼らは13節では踏みにじられる「軍勢」として特定されている。一方、14節は聖所が踏みにじられるという預言を示している。両方の預言は、ザレパテのやもめが契約の使者の火のために二本の柴を集めた後、1844年10月22日に成就した。

アドベンチズムが、天使たちがウィリアム・ミラーに悟らせた預言の時に関する最初の真理を拒んだとき、彼らは自らを盲目にした。1856年、ハイラム・エドソンの八つの記事を通して、パルモニは七つの時の光を増し加えようとしたが、功を奏さなかった。彼らはラオデキヤへのメッセージを拒み、ラオデキヤの五つの悪しき現れを受け入れ、その結果、自分たちが五人の愚かなおとめであることを示した。

その起点において紀元前742年、723年、677年を指し示すイザヤ書7章の六十五年は、終末の歴史である1798年、1844年、1863年において繰り返された。その終末の歴史は、エゼキエル書37章における二本の棒を一つに束ねる出来事によって表され、またサレプタのやもめ（新約のギリシア語でそう呼ばれる）は、聖書預言の第六の王国の歴史の間に、霊的ユダ（栄光の地）において霊的イスラエルと神が契約関係を確立する歴史を表している。その歴史は六十五年の預言の終わりであると同時に、黙示録13章の地から上ってくる獣の始まりも表している。聖書預言の第六の王国の始まりにおいて、二本の棒の結合は、聖書預言の第六の王国の終わりを示している。その歴史には、プロテスタンティズムの角と共和主義の角の並行する歴史が含まれている。

予言的には、勢力、角、国、王国、王、あるいは頭は、用いられる文脈に応じて相互に置き換え可能な象徴である。これらすべての象徴は、エゼキエルが二つの国として特定した二本の棒にも言及している。地の獣の予言的歴史の初めには、プロテスタントの角が一つの国、すなわち一つの角にまとめられた。その同じ歴史の終わりには、共和主義の角が背教的プロテスタンティズムの角と結び合い、一つの国を形成するだろう。その国は黙示録十三章の海の獣の像となる。論理的に言えば、（文字どおりのイスラエルの両家に対して執行された）七つの時の呪いの証言を見ることを拒むなら、1844年に古代イスラエル

の二つの文字どおりの家がどのようにして霊的イスラエルの国となったのかを、私たちは決して見ることはできないだろう。その歴史が見えないなら、アメリカ合衆国の初期におけるその歴史が終わりの歴史をどのように指し示しているのか、すなわち、共和主義の角が初めにプロテスタントの角で示された結集と結合の過程を繰り返すときに、それが終わりの歴史をいかに指し示しているのかについて、私たちはまったく見当がつかないことになる。

次回の記事で、これらの真実について引き続き考察します。